

夢診断の手法を用いて夏目漱石『夢十夜』を読む授業

Learning activities to read *Ten Nights of Dream* by Soseki Natsume,
using the technique of dream analysis

教育 エジソン

〈要約〉

高校一年生の国語総合で、生徒一人一人が夢診断士となって、夏目漱石の小説『夢十夜』を夢分析し、診断書を書くという学習活動を軸に進める授業。潜在意識と夢との関係を理解し、テキストの背後にあるものを読み取ろうとすることで、結果的にテキスト自体の読みが深まるだろうというねらいである。グループでの作品交流やクラスでの発表、ロールプレイなども交えて、生徒たちは楽しみつつ積極的に学習活動に取り組んだ。結果として、作品の読みとともに、自己理解が深まるケースも見られた。今後の課題としては、生徒の意欲をいっそう引き出し、学習を深めるために、評価の適切な活用を考えたい。

I 問題

1)『夢十夜』という教材

夏目漱石の『夢十夜』は、「こんな夢を見た」という書き出しで、夢の内容を語る形式の連作短編小説である。第一夜から第十夜までのうち、東京書籍版の高校教科書「精選国語総合」には、第一夜と第六夜が収められている。

第一夜は、「百年待っていてください」と言い残して死んだ女との約束を守って、墓の前で待ち続ける男の話である。女にだまされたのではと疑念が兆したとき、伸びてきた茎に、真っ白な百合が開く。百合に接吻し、ふと目を上げて、暁の星が瞬くのを見た男は、もう百年が来ていたことに気づく。

第六夜は、護国寺の山門前で運慶が仁王を刻んでいるという夢である。運慶はいかにも鎌倉時代らしい風体だが、周りの見物人はみな明治の人間で、車夫が多い。運慶の手際が余りにみごとなので感心していると、「あれは木の中に仁王の形が埋まっているのを鑿で掘り出すだけだ」と言う男がいる。そんなものかと家へ帰って自分も丸太を彫ってみるが、ぜんぜん仁王は出てこない。そこで、明治の木にはどうして仁王は埋まっていないものだと悟る。

大庭(1974)は、「『夢十夜』のような作品を無理に批評させると、なんだかわからない、どうも辻褄が合わない。妙にぶっているなどと難癖をつける人が多いのではないだろうか」と言っているが、実際、初めて『夢十夜』を読んだ生徒に感想を書かせると、確かに「よくわからない」という反応がふつうである。しかし、「文学の根源とは『夢十夜』のような世界で

ある。こういう世界がなければ、文学は決して生まれない。」(大庭 1974)というのも真実であり、そこにこそ、この教材を取り上げる意味がある。

柄谷(1975)が『夢十夜』はまさに彼(漱石)の生の暗喩であって、暗喩である限り、ぼくらはそこに一義的に対応する事実性を見出すことはできない。ただその本質的な意味を探ることができるだけである」と言うように、登場人物の心情や行動の理由を一義的に説明するができない作品だからこそ、表現の奥にある本質的な意味を考えざるを得ない。また、多様な解釈が可能になるだけに、読み手の個性に応じた読み方があり、教室でそれを互いに交流するおもしろさもある。

教材としての可能性は、きわめて豊かな作品といえるのではないか。

2)本授業の課題とアイデア

(1)授業構想の課題

しかし、表現が象徴的で意味が深い分だけ、「十篇の夢が何を意味しているかを解くことは、たいへんむずかしい」(荒 1960)というのも事実である。すべての生徒が意欲を持って自分なりの解釈を見つけられるよう、うまく課題設定できればいいが、そうでないと、一部の生徒だけが解釈を滔々と語り、他の生徒が置き去りにされるような授業になってしまう。

さもないと、生徒たちはどうしたらいいか戸惑い、発言は少なく、教師も痺れを切らして、最後には自分の解釈を板書しながら説明して、「生徒はひたすらその解説を聞き、ノートに記録し、受容者とし

て終始する」(尾木 1999)という結果になりかねない。

また、解釈が多様で、相互交流するおもしろさがあるといっても、各自の解釈の方向がばらばらで、比較検討する共通のフィールドがなければ、各自の断片的な読みを出し合い、「いろいろな意見があつていいね」で終わるだけで、読みは深まらない。

各自が自分なりの一貫性ある解釈を作り上げつつ、それを交流して相互の違いがわかり、ときには「その解釈はおかしい」と議論もできるためには、目標と形式が明確になるような具体的設定の工夫が必要である。

(2) 夢診断で『夢十夜』を読むと言うアイデア

ところで、土居(1982)をはじめとして、漱石の作品と人物像を精神分析の立場から考察したものは多い。中でも秋山(1981)は、『夢十夜』をユングの理論を用いて分析し、「ユングがいうアニマやシャドウのイメージとその役割を、これほど巧みに表現した作品は少ない」と結論づけている。この秋山の論考は、たいへん興味深いが、夢を分析するのに、必ずしもユングの理論を知らなければならないと言うわけではない。

東山(2004)は、「夢は無意識の産物」で、「自分の無意識の心の状態、考え方を表現しているから……(中略)……意識からだけではわからない心の様相が、夢を分析することでわかる場合も少なくありません」と言い、無意識の心のありようを理解する方法として、夢の自己分析を勧めている。夢は無意識の心(潜在意識)の反映であるにとらえることが、夢分析の第一歩なのである。また、東山(2004)は、夢占いと夢分析を対比させて、夢占いが、「蛇の夢を見ると吉」など、「解釈が画一的であるのに対して、夢分析は夢見者一人ひとりのもつ意味を読み取る手法だ」と、夢分析の意味を的確に述べている。

単一的な記号として未来を予知するパターンがあるかのような「夢占い」との混同さえ避ければ、「無意識からのメッセージ」(東山 2004)として、夢の象徴的意味を考えてみることも自体は、素人でもできる。ユングの夢分析は知らなくても、夢と無意識(潜在意識)との関係を理解し、『夢十夜』の夢が漱石の潜在意識のどんなメッセージを伝えているものかと考えをめぐらすことは、可能なはずである。

そこで、生徒一人一人が夢カウンセラーになって、クライアント漱石の夢を分析し、診断書を書く、とい

う学習課題を構想した。この擬似的な夢診断作業によって、テキストをくり返し読んで熟考し、自分なりの統一的な解釈を作るという体験ができる。また、目標がはっきりしていて、書式が一定になってくるので、比較交流がしやすい。

ここで用意された「この夢は、漱石のどんな心を象徴しているのだろうか」という課題は、通常行なわれる「この作品の主題は何か」という漠然とした課題よりも、何をどう考えたらいいかがわかりやすい。それでいて、「百合は何を象徴したものか」などの指示的な設問よりも、主体的な取り組みや自分なりの視点を生かせる課題になっている。

秋山(1981)は、自分自身が『夢十夜』を分析してみた体験をふり返って、「他の人の夢や創作は、夢分析のように、一度深く自分の心の奥に引き入れて、その無意識的な融合の場で共感することによって、はじめてよくわかるような気がする」と述懐している。まさに、この課題は、自分自身の内面との出会いを通してテキストを読み深めていく作業である。それこそ、文学を読むことの醍醐味を味わわせてくれる体験になるのではないだろうか。

Ⅱ 授業の実際

『夢十夜』を夢分析して診断書を書くという学習課題によって、生徒の主体的な意欲が高まり、読みを深める目的が達成されるだろうとの仮説のもとに、次のような学習を計画し、実施した。

1) 単元名 小説作品の能動的な解釈作業(夢診断)に取り組み、読みを深める

2) ねらい

①想像力を駆使して能動的に作品解釈を作り上げる作業を通じて、読解を深める。

②グループ内発表やクラス発表会を通じて、多様な解釈や個性的な表現を楽しみ、相互に触発しあつて、さらに読みを深める。

③優れた作品に触発されて、自己の内面を探るという、読書の楽しさを体験する。

④夏目漱石の史伝的事実を実感的に学習し、その人間像を身近に感じる。

3) 対象学年・科目 1年生 国語総合 (2学期)

4) 授業計画

全8時間の授業計画を表1に示す。

第1時では、まず第一夜を読む。通読の後、テキ

表1 夢診断作業を活用した『夢十夜』の授業 指導計画

〈单元名〉 能動的な作品解釈作業(夢診断)に取り組み、読みを深める (『夢十夜』)

1 年国語総合 (全 8 時間)

〈計 画〉

第1時 第一夜を読む 通読 カット・イメージ分け作業 感想

第2時 夢診断をしよう

- ① 解説「夢診断の考え方・やり方」を聞く。
- ② 教師のイメージ誘導で、カウンセラーとして夢を聞くというイメージを体験。
- ③ 夢カルテ(夢診断のためのメモ)を書く。

第3時 夢診断書を書こう

- ① 夢カルテを列ごとに回し読み(参考になる意見を、ノートにメモする)。
- ② 読んだものを参考に、夢カルテをさらに充実させる。
- ③ 夢診断書を書く。

第4時 夢診断書の発表

- ① グループで診断書を回覧し、話し合って各賞を決める。班の代表作を決める。
- ② 代表作の発表会(学級全体で)
- ③ まとめ解説 代表作の解釈・考え方を分類して解説

〈自宅課題〉第六夜 カット・イメージ分け、感想

第5時 漱石の相談に答えよう(第六夜)

- ① 夏目金之助の相談を聞く。教師朗読を聞く。
- ② 第六夜のカルテと夢診断書を書く → 終わらない者は自宅課題。

第6時 夢診断ロールプレイ

- ① ロールプレイの方法説明(漱石役の問いかけに、カウンセラーが診断結果を答える)
- ② グループ内相互プレイ 班代表を決める。
- ③ 代表作の発表会(学級全体で)
- ④ まとめ解説 「仁王を彫る」ことをめぐっての理想と現実の対比

第7時 ビデオ視聴

NHK-TV そのとき歴史が動いた「夏目漱石～吾輩は小説家である」(2000 年放送)

〈自宅課題〉期末試験予想問題

第8時 期末試験予想問題 解答・解説

ストの基本的理解を図るために、個人作業として二段階のカット・イメージ分けを行わせた。これは、山崎(2001)にくわしいが、心にイメージした画を単位として本文を分けていくという作業である。第一段階として、たとえば「マンガのコマ」のように細かくイメージして本文に区切り線を入れた。次に「紙芝居」を例にして、より少ない枚数の画に整理するとしたら、と問いかけて、より大きな区切りを見つけさせた。これらの作業のため、専用のプリントを用意し、作業の後、感想も書かせた。

第2時から、夢診断の作業に入る。まず、教師が「夢診断」の意味とやり方を説明した。「夢占い」は、夢が未来を予知するという前提に立つ非科学的なものだが、夢が潜在意識のありようを象徴的に示す

という科学的なメカニズムに基づいて夢を適切に分析すれば、深い心の状態を診断することができる。それが「夢診断」である、との説明である。具体例として、教師が書いた「夢診断書」をプリントして配布した。実際の作業は、「夢カルテ」というプリントに記入することによって進める。夢の中に出てきた事象から連想を働かせて、シンボルの意味を推測していく。カルテと診断書は左右に並べて印刷されており、左のカルテにメモしたことをもとに、右の診断書をまとめていく。その作業例は、図1「夢カルテ・夢診断書の作業実例」に示されている。

以上、学習内容の説明ののち、作品のイメージ化を促し、発想を豊かにする目的で、教師によるイメージ誘導を行なった。生徒自身がカウンセラーとな

って相談室にいと、漱石が来談し、夢を語り始める、というイメージである。そこで、教師が本文を朗読し、夢の情景をイメージさせた。そのあとで、各自、夢カルテを書く作業を行なった。

第3時では、実際に夢の診断書を書く。しかし、まだやり方がよくわからないとか、連想がうまく出ないという生徒がいる。そこで、各自書いた夢カルテを順に後ろの生徒に渡し、一番後ろの生徒が先頭に持ってくる、という形で、回し読みさせた。その際、参考になる解釈があれば、各自ノートにメモするよう指示した。三、四人回ったら終了して、各自夢カルテの作業を続け、夢診断書を完成させた。

第4時は、各自の作品を交流する時間である。夢診断書をグループで回覧し、話し合っ各賞を決める。各賞とは、「鋭いで賞」、「きれいで賞」、「笑えるで賞」、「怖いで賞」など教師が提示したものを使い、各班で自由に追加してよい。賞を話し合う過程

ある。その上で、班の代表作を決める。代表作は、班長が前に出て、学級全体の前で朗読した。「〇班の△△賞に選ばれた作品です」とだけ紹介し、作者名は公開しない形で行なった。まとめとして、教師が代表作を分類・整理して解説し、余談として、漱石の神経衰弱や恋人説について話した。これで第一夜の学習を終え、第六夜のカット・イメージ作業用紙を配布して、自宅課題とした。

第5時では、より具体的な設定の中で、漱石の相談に答える夢診断書を書く。まず、教師が夏目金之助(＝漱石の本名)に扮して、自己の経歴と相談内容を語り、第六夜を朗読した。そのあとは、各自、第六夜のカルテと夢診断書を書く。授業中に書き終らない者は、自宅課題とした。夏目金之助の語った経歴と相談内容を、表2に示す。

第6時は、第六夜診断書の発表会だが、漱石とカウンセラーの面談をロールプレイする形で行なう。

夢カルテ (診断のためのメモ)

クライアント名 夏目漱石 第六夜

1年 組 番

診断士 ○田○

1. 夢分析メモ

夢診断士が気になる事物(もの、できごと、人の行動など)を取り上げ、自分の連想を自由に描かせて、意味を解釈する。

事物	連想 (左の事物に思いつくこと)	意味
運慶	大きな存在	憧れ (小説家)
委細煩着なく...	まわりが見えてない	自分のやりたい事をひたすら続ける
仁王	輝きを持った何か	小説家として成功するか どうかの希望の光

2. スバリ診断 メモ

・潜在意識が語っているもの 運慶は憧れであり小説家になりたいと思っている。委細煩着なく鑿と槌を動かしている...というのは小説家になりたい気持ちでいっぱいまわりが見えてない事を表わしている。そして仁王とは小説家になり成功するかの希望の光を象徴している。しかしこの夢の話では自分で調刻をしてクライアントの置かれている状況・抱えている問題・過去の経験 (大胆に推測) みたが仁王は見つからない。今あなたは大学教員で収入も安定しています。からなかったとしてもあなたは小説家になることに憧れを持っていて、なっている。小説家として生きていこうか迷っています。

3. アドバイスのためのメモ

家族の事を考えると、安定した収入を得るため、小説家になる事はあきらめた方がよいでしょう。

班代表

夢の診断書

夏目漱石 様

1年 組 番

診断士 ○田○

第六夜の夢について

診断 (夢から見て取れるあなたの置かれている状況、直面している問題など)

あなたは今、大学教員として働いています。しかし、小説家になる事に憧れを持っていて、小説家として生きていこうか迷っています。

夢の分析 (夢の内容が何を意味しているか)

夢に出て来た運慶はあなたにとって小説家になりたいという憧れの気持ちを表しています。委細煩着なく鑿と槌を動かしている...というのは小説家になりたい気持ちばかりでまわりが見えてない事を象徴しています。あなたは夢で運慶に憧れを持ち、自分も調刻をして仁王を見つける事が出来るのではないかと、行動に移しています。しかし、仁王を見つける事が出来ませんでした。仁王は小説家として成功するかどうかの希望の光を表しているだろうと思われます。

アドバイス あなたは小説家になりたい気持ちでいっぱい、まわりの事を考えていません。今のあなたは大学教員として収入が安定しているので、家族の事を考えると小説家として生きていくのはあきらめた方がよいでしょう。どうしてもあきらめられないのなら、大学教員をしつつ、小説を書き、出版をして、両立していいと思います。

(夢診断について) 思います。

夢は潜在意識からのメッセージであり、夢に現れたものや人や行動は、心の奥底にある感情を象徴的に教えてくれます。その意味を正しく理解すれば、あなたの直面している問題を解決するヒントが得られるのです。

図1 夢カルテ・夢診断書の作業実例

表2 漱石の相談内容

漱石が語る相談の内容
※下線部が板書した事項
夏目金之助(=漱石の本名)
四十歳 妻、子供四人
職業、東京帝国大学講師(英語、英文学)
ロンドン留学の経験。
このままならば教授への道は確実だが、自分は教師の職はあまり好きではない。
最近、友人の勧めで小説を書き始めた。
『吾輩は猫である』、『坊ちゃん』、『草枕』。
それがたいへん好評で、自分でも書いていて楽しい。
そこで、
このまま大学教員を続けるか
大学を辞めて小説家として生きるか
悩んでいる。
ところで最近、こんな夢を見た(第六夜)。
この夢が私の進むべき道をどのように指し示しているのか、診断してほしい。

漱石役が決まった台詞で問いかけ、カウンセラー役は、自分の診断書を項目ごとに読んで答える。まず、グループ内で、順繰りに漱石役、カウンセラー役を演じ、話し合っグループの代表作を決める。その作品を、各グループから前に出て、学級全体の前で演じた。その後、教師が、まとめとして、自由自在に仁王を彫る運慶は理想であり、いくら彫っても仁王を彫り当てられないのは現実の姿である、という整理を行なった。

第7時は、NHKテレビ『そのとき歴史が動いた』の『夏目漱石〜吾輩は小説家である』(2000 年放送)をビデオで視聴する。これはまさに、帝大教授になるか小説家になるかという、漱石の悩みと決断にスポットを当てた番組である。これを視聴することで、前回、夏目金之助の相談という形で学んだ漱石の史伝的事実について、より具体的に理解することをねらいとした。視聴後、そうした関連づけを行ない、自宅課題として期末試験の予想問題を配布した。

第8時は、予想問題の解答・解説をしながら、学習のねらいをあらためて説明し、本文理解のまとめを行なう。自由な解釈を駆使しながら、本文自体をよく読むことが大切であることを強調した。

5) 評価

学業成績の評価は、期末試験の得点と課題の提

出点で行なった。

提出すべき課題は、第一夜と第六夜のカット・イメージ作業プリント、夢カルテ、夢の診断書であるが、完成・提出の有無を取組みとして評価し、内容の優劣は問わなかった。ほとんどの生徒が完成・提出したが、一部に未完成、未提出の生徒があった。

期末試験では、本文の整序問題・穴埋め問題、部分的なカット・イメージ分けの問題、一定の枠組みを与えた上での本文解釈の問題などを出題した。授業とテストとのギャップに戸惑わないように、「期末試験予想問題」を出し、解答・解説することで、テストの形式やねらいについて理解させた。

作品のとらえ方がどう変化したかをみるために、期末試験の中で、第一夜または第六夜いずれかを選んで自由に感想を書かせた。

また、この授業自体を生徒がどう受けとめたか、読書への意欲などに変化があったかを調べるため、期末試験の中でとくに『夢十夜』の授業自体の感想を求めた。

III 結果と考察

第一夜の学習は条件なしで、自由な作品解釈をもとめる課題であり、第六夜では漱石の経歴という具体的事実を前提にし、その悩みに答えるという解決課題のある作品解釈を行なった(注)。変化をつけることで、異なった読みの姿勢を体験させたいと考えた。

期末テストで、どちらか好きな方を選択し、感想を書けという課題を与えた。選択数は、解答数118名のうち、第一夜62名、第六夜56名であり、好みは、偏ることなく分かれている。また、感想を見ても、第一夜を選んだ生徒は、自由に解釈できて深みを感じる点を好み、第六夜を選んだ生徒は、具体的な漱石の悩み相談を受けて筋の通った解釈ができる点を好んでいるのが伺える。第一夜の自由な解釈だけでは、ついていけず、不満の残る生徒が出た可能性があるし、第六夜の条件付課題だけでは、窮屈さを感じる生徒もいたであろう。生徒一人一人の好みや学習スタイルに応ずる「適性処遇交互作用」(R. E. スノーら)の面からも、異なるアプローチを用意したことはよかったと考えられる。

読みの質的变化の指標として、表3に、作品感想の変化の例を挙げた。第一次感想は、第一夜、第六夜とも、カット・イメージ分けの作業をした直後

に書き、第二次感想は、学習終了後の期末テストの中でどちらかを選んで書いたものである。

まず、第一夜の感想を見ると、生徒Aは、感想の内容に変化の少ない例である。学習前と後で同じ印象を表わす語句を使っており、学習による変容があまり伺えない。こうした生徒はむしろ珍しい。

生徒Bは、最初、「信じてやるなんて、お人よしだ」と書いていたのに、後では、「信じれば必ずそのお返しが来る」と、同じ行為を肯定的にとらえ、「自分

も見習うところがたくさんあった」とまで言っている。内容としてはあまり深くないが、明らかな変化の见られる例である。

生徒Cは、初めは納得の行かなかった男の行動を「すごいなあ」、「そこまで男は女を愛していたんだ」と理解し、「自分も百年待つ、と断言できるようになりたい」と、気持ちが大きく変化している。

生徒Dは、最初、男と女の関係、死ぬと言う女を男がなぜ止めなかったのか、それが気になってい

表3 作品感想の変化(例)

〈第一夜〉

生徒	第一次感想(学習前) カット・イメージ分け作業後	第二次感想(学習後) 期末テスト時
A 女	文を見た感じで、字とかの雰囲気や <u>まとまりがキレイ</u> だと思った。話も <u>すごく幻想的</u> で、読んでいて楽しくなる。	第一夜はまさに夢という雰囲気が出ているので、私は好きです。ことばの響きや文を見たときの <u>まとまり感</u> が <u>すごく幻想的</u> だと思います。表現や登場してくるものに凝っている感じがしました。
B 男	女は漱石に願いを聞いてほしくて夢に出てきたんじゃないかと思った。漱石も、その知らない人のことを <u>信じてやるなんて、お人よしだ</u> と思った。	女はなぜ死んでしまったかがよくわからなかったが、その女を待ち続ける男は、 <u>そうとう女を信じて</u> できなかったことだと思う。その信じる心がうまく表現されている第一夜は、 <u>自分も見習うところがたくさんあった</u> 。 <u>信じれば必ずそのお返しが来る</u> ことが十分に伝わってきた。
C 男	百年も待つなんて……と思った。 <u>なぜ百年も待たなければならぬのか</u> が、自分にはわからない。	女の人死んでしまうのは悲しいが、そのあと男が約束を果たすために百年もずーっと待っていられたことに関して、 <u>すごいなあ</u> と感じた。自分だとしたら、絶対できない。 <u>そこまで男は女を愛していたんだ</u> と感じた。 <u>自分も百年待つ、と断言できるようになりたい</u> 。
D 女	男と女の関係がとても気になった。	私はこの作品を読んで、まず、何故「死ぬ」と言っている女を男は止めなかったのだろうと不思議でした。けど、何度か読むうちに、女には <u>死ぬしか道が残されていないような状況</u> にいるのだと思いました。そうだとわかったと、この話の <u>悲しさや絶望的な面</u> が見えてきて、私はどっぴりとこの作品にはまってしまいました。

〈第六夜〉

生徒	第一次感想(学習前) カット・イメージ分け作業後	第二次感想(学習後) 期末テスト時
E 男	<u>難しい漢字</u> がたくさんあって、読むのが大変だった。あまり夢っぽくないような印象を感じた。 <u>イメージ</u> するのが難しい。	第六夜は、 <u>夏目漱石の小説</u> に対しての <u>苦しみや喜び</u> などがしっかりと表わされていて、とても奥が深い感じがした。一回読んだだけではわからなかったが、 <u>何回も読んでいくうちに、第六夜がいったい何を意味しているのか、わかっていっておもしろかった</u> 。
F 女	鎌倉時代と明治時代が混ざっているのが不思議だった。	第六夜では、仁王を彫ることはやはり <u>運慶</u> にしかできないことだった。そして、それを <u>夏目漱石</u> に例えると、 <u>小説を書くこと</u> だった。この話を読んで思ったことは、誰にでも、 <u>その人にしかできないことがあるんだなあ</u> ということです。私は、 <u>自分にもそれがあるかもしれない</u> と思い、少し自分に自信……というか、期待を持つことができました。

た。しかし、何度も読むうちに、女が置かれている絶望的な状況に想像が思い至り、その悲しさを感じ取っている。必ずしも一般的な解釈ではないが、自分なりに読みを深めた例と言えるだろう。

第一夜は自由な解釈にゆだねているので、千差万別な感想が出てくるはずだし、実際そうだが、見方を変えると、一人一人異なる中に、どこかで共通するものを読み取っているという感じも伺える。

第六夜では、生徒Eが、学習前は漢字の難しさとかイメージすることの難しさなど、表面的な感想しか書いていないが、学習によって「何回も読んでいくうちに」、「意味(自分なりの解釈)がわかり、おもしろかった」と感想が変化している。典型的な例である。

生徒Fは、運慶にとっての「仁王を彫る」ということ、漱石にとっての「小説を書く」ことを、「その人にしかできないこと」という共通項で理解し、さらにそれを自分自身に結びつけて、目を将来に向けている。

第六夜では、具体的な条件を与えたので、運慶を漱石自身と重ねるといった解釈の方向性はどうしてもでてきてしまう。それだけに、むしろ個人の見方の違いが微妙な点に表れておもしろい。たとえば、「仁王を彫ること」ひとつとっても、「小説を書くこと」ととらえる見方が多いが、「小説家としての才能を彫り出すこと」とする見方もある。いずれの場合も、自由自在に仁王を彫る運慶は理想であり、いくら彫っても仁王を彫り当てられないのは現実の姿である、という形ではおおむね一致している。ままならない現実をどうとらえるかで、診断が分かれ、だから小説家をあきらめて帝大教授になるべきだというドライなアドバイスと、その苦しみに耐えて理想を求めるべきだという考え方を両極にして、どちら寄りの診断になるかは、生徒一人一人の価値観により違いが出てくるようである。

生徒が行なった診断・解釈の詳細については、紙数の関係もあり、また機会をあらためて整理し、考察してみたい。

授業自体の感想としては、「楽しい」または「おもしろい」という語を書いている生徒が解答総数114名のうち、76名いる。他に、「勉強になった」、「よかった」と書いている生徒も多い。その内容は、深く考えて読んでいく作業自体のおもしろさと、グループの交流やクラスでの発表の楽しさに大別されるが、両方の面を挙げている生徒も多い。

とくに、最初、夢診断という作業について、目的

がわからなかったり、難しいと感じたりしたが、やっているうちにできるようになり、おもしろくなったという感想が多い。その変化の理由は、自分自身の取り組みの成果だが、大きなきっかけとして、他の生徒と作品を交流させたことが挙げられている。

マイナスの感想は少ないが、「漱石の経歴などは、作品解釈と関係ないと思う」と書いた生徒が2名、「読解力がついていく感じがしない」という生徒が1名いた。また、「自由なのはいいが、自分の読み取りがずれているのに、気づかないままできるとしたらいやだ。だから、正解のある勉強もしたい」という感想も1名あった。これについては、今後の課題で触れたい。

以上、結果の一部を紹介したが、作品の主体的解釈を作り上げるという活動が十分魅力的で、生徒の意欲を喚起するものであれば、生徒は意欲的に学習に取り組み、読みの目標は達成されるであろう、との仮説は裏づけられたと考える。しっかり読むこと自体をいくらやれと言っても簡単にはできないが、その先の解釈活動への意欲を引き起こすことで、読むことは一手段となり、しっかり読むという目的は、結果としてできてしまう。また、その際、生徒同士が各自の読みを交流することが有効であることも明らかにした。

生徒の自発的な読みを引き出す、具体的な授業展開の一例を提示できたのではないと思う。

IV 今後の課題

高木(1999)は、国語が嫌いな学生の挙げる理由として、「授業中には『国語にはいろいろな答えがあり、正解はない』と言っておきながら、テストでは一つの答えしか認めないということへの矛盾」を指摘している。

これはむしろ、現行カリキュラムや学校のあり方に内在する矛盾であるが、教師一人一人は、常にこの問題に直面しないわけに行かない。今回の期末テストでも、この点では工夫をした。

まず、期末試験予想問題を作り、授業中に解答・解説することで、テストの形式やねらいについて、生徒に理解させるとともに、授業とテストとのギャップを埋める努力をした。

その上で、答えが一つになる問題は、なるべく元のテキストに戻って正答が指摘できるものにし、多

様な答えが可能な問題は、ある範囲の中で、いくつかの正解を認めることにした。しかし、なかなかそうできなかった問題もある。

夢診断書の作品自体については、生徒同士の肯定的評価活動(班で各賞、代表を決める)を活用し、教師による質の評価はしなかった。学習課題は手段であって、自主的、主体的に取り組むことに意義があり、読みが深まったかどうかという達成度の評価はテストでやればよい、という基本的なスタンスがある。主体的な意欲を引き出すことが目的である活動に細かな評価観点を示したりすれば、せっかくのやる気を損なってしまうだろう、という懸念も持っている。

しかし、生徒が一生懸命書いた作品を教師が熟読してそのよい点を具体的に伝えられれば、さらに学習意欲を引き出せることはまちがいない。また、授業感想の最後に紹介したように、「自分の読み取りがずれているのに、気づかないままにいる」かもしれないと不安を感じる生徒もある。そうした生徒が、安心感を得たり、自主的に方向修正したりするために、教師からの評価情報をフィードバックすることは、必要かつ有効であろう。

そうした意味での指導と評価のあるべき姿について、今後も模索していくことを課題としたい。

注 第六夜を、帝大を辞して小説家になるべきかどうかという漱石の悩みと関係づけたのは、授業のための脚色であり、何ら根拠のあることではない。しかし、他人には伺い知ることのできない漱石の内面については、確認されている事実と作品を根拠にして、さまざまな解釈や議論が行われている(たとえば、漱石の恋人をめぐる諸説 江藤 1977)。ちょうどそうした論客たちのように、仮説を持ってテキストを精読し、証拠を見つけていくおもしろさを疑似体験させようとした。そのねらいに照らして、許される範囲の脚色だと考える。

V 文献

秋山さと子 1981 夢診断 講談社現代新書 613, 96-134.
荒正人 1960 評伝夏目漱石 実業之日本社
土居健郎 1982 漱石の心的世界 漱石文学における「甘え」の研究 角川書店
江藤淳編 1977 朝日小事典夏目漱石 朝日新聞

社, 106-108.

東山紘久 2002 プロカウンセラーの夢分析 創元社, 12-40.

柄谷行人 1975 内側から見た生——「夢十夜」論文芸読本夏目漱石 河出書房新社

河野庸介 1999 これからの国語教育の目指すもの 月刊国語教育‘99・5別冊「読むこと」の指導改善ハンドブック 東京法令出版, 6-9.

大庭みな子 1974 「文鳥」「夢十夜」と「坑夫」——文学における我と非我—— 夏目漱石全集5 角川書店

尾木和英 1999 「読むこと」の学習指導をどう充実させるか 月刊国語教育‘99・5別冊「読むこと」の指導改善ハンドブック 東京法令出版, 10-13.

高木展郎 1999 学ぶ意欲を喚起する指導への発想 月刊国語教育‘99・5別冊「読むこと」の指導改善ハンドブック 東京法令出版, 14-17.

山崎茂雄 2001 「カット・イメージ読解法」の概要とその効果 読書科学, 48, 94-102.